

新作音楽公演 「歌と逆に。歌に。」

2024年8月16日～18日、クリエイティブセンター大阪にて4公演開催。

音楽家・日野浩志郎と詩人・池田昇太郎による、
音と声の表現を探る、3カ年プロジェクトがスタート。

新作
音楽
公演

2024年
8月16日|金|
→18日|日|

作曲 日野 浩志郎
詩・構成 池田 昇太郎
会場 クリエイティブセンター大阪内
Black Chamber

歌と
逆に。
歌に。



詩人・小野十三郎の書く「大阪」を巡り、 音と声による「歌」の可能性を探る

大阪を拠点とし、既存の奏法に捉われず音楽の新たな可能性を追求し続けてきた音楽家・日野浩志郎と詩人・池田昇太郎による、音と声の表現を探る3カ年プロジェクト「歌と逆に。歌に。」。初年度は、大阪・名村造船所跡地のクリエイティブセンター大阪にて、新作公演を発表する。

本プロジェクトにおいて重要なテーマとなるのが、1903年に大阪で生まれ、戦前から戦後にかけて大阪の風景や土地の人々を眼差してきた詩人・小野十三郎だ。1936年～52年、小野が大阪の重工業地帯取材し、1953年に刊行された詩集『大阪』と、彼の詩論の柱である「歌と逆に。歌に。」を手がかりに、同詩集で描かれた地域や地名をフィールドワークとして辿る。

小野十三郎という詩人の作品に向き合うということは彼の生きた時代とその社会、彼の生まれた街、育った街、住んだ街、通った道、生活、彼の思想、友人や影響を受けた詩人を訪れることでもある。本作ではそうした街や道、風景を巡りながら、詩集『大阪』にて描かれる北加賀屋を舞台に、小野が試み、希求した「新たな抒情」を感受し、独自に解釈し、編み直し、それを音楽公演という時間と空間の中に試みる。

公演情報

新作音楽公演 | 「歌と逆に。歌に。」

日程：2024年8月16日（金）～18日（日）

公演日時：①8月16日（金）19:30- ②8月17日（土）14:30-

③8月17日（土）19:30- ④8月18日（日）14:30- ※開場は各開演の30分前を予定

会場：クリエイティブセンター大阪内 Black Chamber <https://namura.cc/>

料金：一般=4,000円、U25=3,000円、当日=5,000円

チケット取扱い：ZAIKOイベントページにて <https://toritomokai.zaiko.io/>

関連イベント | オープンスタジオ

公演を前に、作品制作の現場を間近でご覧いただけます。

当日はリハーサルだけではなく、クリエーションやリサーチの進捗共有なども行う予定です。

日時：2024年7月7日（日）14:00-17:00

会場：音ビル（大阪府大阪市住之江区北加賀屋5-5-1）

料金：500円(要申込・途中入退場自由)

申込：Googleフォームにて

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLScxWGiLlo8QOpnDdhcFPi6XFsBfgAkv4OkVeBpl1c7qOheMaw/viewform?usp=sf_link

クレジット

作曲：日野浩志郎

詩・構成：池田昇太郎

出演：池田昇太郎、坂井遥香、白丸たくト、田上敦巳、谷口かなな、中川裕貴、日野浩志郎

舞台監督：小林勇陽

音響：西川文章

照明：中山奈美

美術：LOYALTY FLOWERS

宣伝美術：大槻智央

宣伝写真：Katja Stuke & Oliver Sieber

宣伝・記録編集：永江大

記録映像：Nishi Junnosuke

記録写真：井上嘉和、Richard James Dunn

制作：伴朱音

主催：株式会社鳥友会、日野浩志郎

共催：一般財団法人 おおさか創造千島財団「KCVセレクション」

助成：大阪市助成事業、全国税理士共栄会

協力：大阪文学学校、エル・ライブラリー

問合せ：utagyaku@gmail.com

コメント

日野浩志郎（作曲） | 制作にあたって共同制作者へ向けたメッセージ

発端となったのは大阪北加賀屋を拠点とする「おおさか創造千島財団」から2年連続のシリーズ公演を提案されたことでした。声をテーマにした音楽公演を以前から模索していたのもあり、大阪で山本製菓というギャラリーを運営していた詩人の池田昇太郎くんに声をかけたところ、大阪の詩人である小野十三郎に焦点を当てた公演を行うのはどうかと提案してくれました。

小野十三郎は戦前から活動を行ってきた詩人であり、アナーキズムに傾倒した詩集の出版等を経て、「短歌的抒情の否定」、つまり短歌（57577）の形式や感情的な表現を否定するという主張を行った詩人です。中でも1939年に出版された小野の代表的詩集「大阪」を読んでいると、詩の構造や感情的な表現へのカウンター/嫌悪感のようなものを感じると同時に、「硫酸」、「マグネシウム」、「ドブ」、「葦（植物のあし）」、のような冷たく虚無を感じる荒廃した言葉が際立ち、ポストパンクを聴いてるようなソリッドさに何度もゾクっとさせられました。詩集の中で大阪の様々な地名や川等が登場しますが、今回の会場である名村造船所周辺を含む工場地帯は詩集の中でも重要な場所であることが分かります。

公演内容についてはこれからのクリエイションによって定めていきますが、現状では小野の代表的詩集「大阪」（1939）を中心に置き、小野の詩を読み取りながら音楽と昇太郎くんのテキストを制作していきます。一般化された短歌のような形式の否定というのは詩だけに留まらず、音楽に対しても同様に言及されているところがあり、音楽的常識に則ったものや直接感情的に訴えるような音楽は制作しない予定です。詩と音楽に対する関わり方も難しく、音楽を聴かせる為の詩でも、詩を聴かせるためのBGMでもない、必然的で詩と関係性の強い音楽を作ることが目標であると思っています。

このプロジェクトは一旦3年を計画しています。最初の2年は大阪で公演を行った後、公演に関する音源作品と出版物をEU拠点の音楽レーベルから発売、そして3年目には海外公演を行うという目標で進めています。

制作を始めてまだ間もないですが、取り上げた題材の強大さと責任の大きさを感じています。「詩と音楽」ということだけでも難しいですが、天邪鬼で尖った小野の美学に沿うには単にかっこいい表現というだけでは許してくれそうもありません。主に自分と昇太郎くんが表現の方向性の舵を切って進めていく予定ですが、各々でも小野の詩や思想に触れて解像度を上げてもらえるとうれしいです。どうぞよろしく願いいたします。

池田昇太郎（詩・構成） | 小野十三郎という詩人と向き合うこと

小野十三郎という詩人の詩と詩論に向き合うことは彼の生きた時代とその社会、彼の生まれた街、育った街、住んだ街、通った道、生活、彼の思想、友人や影響を受けた詩人を訪れることでもある。

翻って、それは私たちの生きる時代とその社会、私たちの生まれた街、育った街、住む街、通る道、生活、私たちの思想、つまり私たち自身を訪れることでもある。

その上で、詩集「大阪」を通して小野が試み、希求した「新たな抒情」を感受し、独自に解釈し、編み直し、それを音楽公演という時間と空間の中で再構成することを試みる。

本作のタイトル「歌と逆に。歌に。」は小野十三郎の詩論の一節に基づくものだが、公演に用いたテキストでは、小野の詩や詩論を引用することを最低限にし、書き下ろしとすることにした。そのようにするしかなかった諸般の事情もあったが、詩人の遺した言葉から感銘を受けるに留まるのではなく、新たに言葉を紡ごうとする意義を問い直す必要があった。

1936年から52年という時代の中で強固な意志を持って書き記された詩篇を読み解き、自らの創作言語にしていくことは並大抵ではなく、仮にあらゆる必然がそこにあったとしても、容易いことではない。

小野の見つめた、ある時代の大阪。その時代のその街と風景以上に普遍的な目。土地から切り離された人々が、もう一度土地と結ばれるためではなく、その断絶の上で、大きな力に抗い続ける個としてあること。このアスファルトの下に流れる水が、流れ出る場所、浸み出す場所、それを吸って育つ葦、そして枯れる葦。その繰り返し。その見えない流れを捉えること。

2024.6.17 池田昇太郎

参考資料

広報用素材 | メインビジュアル (Web / 印刷媒体データ、各種比率)



広報用素材 | 宣伝写真 : Katja Stuke & Oliver Sieber (要撮影クレジット)



※上記、メインビジュアル・宣材写真は、以下にてまとめてダウンロードいただけます。
クレジットの情報もフォルダ内に含めていますので、ご確認ください。

<https://www.dropbox.com/sc/fo/2mkmfr8tsesoctfgsq027/AH6kxHLwfPhih8BCvbwOq90?rlkey=nsi-wk12tzdxp7i0qy2adgk8t5&dl=0>

プロフィール | 出演者



Photo: Dai Fujimura

日野浩志郎 / Koshiro Hino

音楽家、作曲家。1985年生まれ、島根県出身。現在は大阪を拠点に活動。メロディ楽器も打楽器として使い、複数拍子を組み合わせた作曲などをバンド編成で試みる「goat」や、そのノイズ／ハードコア的解釈のバンド「bonanzas」、電子音楽ソロプロジェクト「YPY」等を行っており、そのアウトプットの方向性はダンスミュージックや前衛的コラージュ／ノイズと多岐に渡る。これまでの主な作曲作品は、クラシック楽器や電子音を融合させたハイブリッドオーケストラ「Virginal Variations」(2016)、多数のスピーカーや移動する演奏者を混じえた全身聴覚ライブ「GEIST(ガイスト)」(2018-)の他、サウンドアーティストFUJIIIIIIIIIIITAと共に作曲・演奏した作品「INTERDIFFUSION A tribute to Yoshi Wada」(2021-)、古舘健や藤田正嘉らと共に作曲した「Phase Transition」(2023)、等。佐渡を拠点に活動する太鼓芸能集団 鼓童とは2019年以降コラボレーションを重ねており、中でも延べ1ヶ月に及ぶ佐渡島での滞在制作で映像化した音楽映画「戦慄せしめよ/Shiver」(2021、監督 豊田利晃)では全編の作曲を日野が担当し、その演奏を鼓童が行った。音楽家・演出家のカジワラトシオと舞踊家・振付家の東野祥子によって設立されたANTIBODIES Collectiveに所属する他、振付師Cindy Van Acker「Without References」、映画「The Invisible Fight」(2024年公開、監督Rainer Sarnet)等の音楽制作を行う。



©tramminhduc

池田昇太郎 / Shotaro Ikeda

1991年大阪生まれ。詩人。詩的営為としての場の運営と並行して、特定の土地や出来事の痕跡、遺構から過去と現在を結ぶ営みの集積をリサーチ、フィールドワークし、それらを基にテキストやパフォーマンスを用いて作品を制作、あるいはプロジェクトを行なっている。廃屋を展覧会場として開くことの意味を視線と身体の運動からアプローチしたインスタレーション「さらされることのあらわれ」（奈良・町家の芸術祭はならあと2021）、一見するとただの空き地である元市民農園を参加者と共に清掃しながら、その痕跡を辿り、かつての様子を無線越しに語るパフォーマンス「Only the Persiomon knows」（PARADE#25、2019）西成区天下茶屋にて元おかき工場の経過を廻るスペース⇄プロジェクト「山本製菓」（2015～）、「骨董と詩学 蛇韻律」（2019～）他。

坂井遥香 / Haruka Sakai

2014年野外劇で知られる大阪の劇団維新派に入団し、2017年解散までの作品に出演。2018年岩手県陸前高田市で滞在制作された映画『二重のまち／交代地のうたを編む』（監督：小森はるか＋瀬尾夏美）に参加。近年の出演作に孤独の練習『Lost & Found』（音ビル,2020）、許家維＋張碩尹＋鄭先喩『浪のしたにも都のさぶらふぞ』（YCAM）、梅田哲也『入船 23』、『梅田哲也展 wait this is my favorite part 待ってここ好きなとこなんだ』（ワタリウム美術館）など。場所や土地と関わりを持ちながらつくる作品に縁・興味がある。

白丸たくト / Takuto Shiromaru

音楽家。1992年生まれ。兵庫県出身。茨城県大洗町在住。実感のなさや決して当事者にはなれない事柄を、社会・歴史・その土地に生きる人々との関わりから音楽を始めとする様々なメディアを用いて翻訳し、それらを読み解くための痕跡として制作を続けている。「詩人の声をうたに訳す」をコンセプトに行う弾き語り(2016～)や、ラッパー達と都市を再考するプロジェクト「FREESTYLUS」(2021～)等。

田上敦巳 / Atsumi Tagami

1985年生まれ。広島県出身。音楽家日野浩志郎を中心に結成されたリズムアンサンブル「goat」のベースを担当。バンド以外に不定形電子音ユニット「black root(s) crew」のメンバーとして黒いオパールと共に不定期に活動。2011年～2018年まで「BOREDOMS」のサポートを行う他、2022年からはダンサー東野洋子とカジワラトシオによるパフォーマンスグループ「ANTIBODIES Collective」に参加。

谷口かな / Kanna Taniguchi

京都市立京都堀川音楽高校、京都市立芸術大学の打楽器科を卒業。在学時はライブパフォーマンスグループに所属し、美術家、パフォーマー等と共演、即興演奏の経験を積む。卒業後はフリーランスの音楽家として室内楽を中心に活動。卒業後も継続して他分野との即興演奏に取り組んでいる。これまでに、東京フィルハーモニー交響楽団、京都室内合奏団と共演。近年はヴィブラフォンでの演奏に最も力を入れており、2023年11月にヴィブラフォンソロを中心とした初のソロリサイタル「vib.」を京都芸術センターで開催。

中川裕貴 / Yuki Nakagawa

1986年生まれ。三重／京都在住の音楽家。チェロを独学で学び、そこから独自の作曲、演奏活動を行う。人間の「声」に最も近いとも言われる「チェロ」という楽器を使用しながら、同時にチェロを打楽器のように使用する特殊奏法や自作の弓を使用した演奏を行う。音楽以外の表現形式との交流も長く、様々な団体やアーティストへの音楽提供や共同パフォーマンスを継続して行っている。2022年からは音楽家・日野浩志郎とのDUOプロジェクト「KAKUHAN」がスタート。令和6年度京都市芸術文化特別奨励者。

=====

本プロジェクトに関するお問い合わせ

3カ年のプロジェクトということもあり、長い目で伴走いただけるメディアやライターの方々からのお問い合わせもお待ちしております。個別インタビューだけでなく、小野十三郎を通して現代の「歌」のありかたを考える座談会/対談や、大阪の川や海を巡るフィールドワーク日記（写真多数あり）、過去にあった出来事・作品と向き合うための姿勢・態度を探る往復書簡などなど、拡がりのある企画も対応できると思います。どうぞ、よろしくお願いいたします！

取材対応：

伴（制作） ban.schnee@gmail.com

永江（編集） n@muesum.org